

化財保護課

# 前橋天神山古墳図録

前橋市教育委員会







## はじめに

前橋天神山古墳は、広瀬団地造成にともない記録保存のやむなきにいたったものである。

後閑町地内には30数基の古墳が所在し、その数と質とにおいて、一大古墳群をなしていた地域である。とくにここ数年来、高度成長をあゆむ経済、社会の発展とともに開発の中で、これら古墳を含めて埋蔵文化財の滅失き損はいちじるしいものがある。

この天神山古墳は、朝倉町の八幡山古墳とならんと規模の大きいものであり、その保存について前々から措置を講じてきたものである。昭和43年8月から調査に着手し、第5次にわたって実施され、その全貌が明かにされた。特に第3次以降の調査では、粘土構の発見とその遺物のすばらしい出土をみ、この古墳の重要さが再確認されたのである。

本古墳の調査は、尾崎喜左雄博士をはじめ前橋工業高等学校松島栄治先生、前工生徒、群馬大学学生の多大の労をわざらわした。特に前橋工業高等学校の歴史研究部の生徒諸君は、着手以来この古墳の調査に全勢力をなげうってくれたことは感謝にたえない。

本古墳は、県の補助を受け後円部の一部、主体部を買上げ保存できることになり、鏡をはじめとする遺物も完全に保存をなしえた。

本市において、かつてみられなかった充実した古墳の発掘調査となつたばかりでなく、貴重な学術的成果を得ることができた。そして、これが契機となって、文化財保護の上で、市民および、関係者の認識を深めることができたのである。ここに、調査の結果を図録として記録し、貴重な文化財の保護をはかり、次代への責任を果たすとともに、さらにこれが活用によって広く社会文化の発展に寄与する資としていきたいと考える次第である。

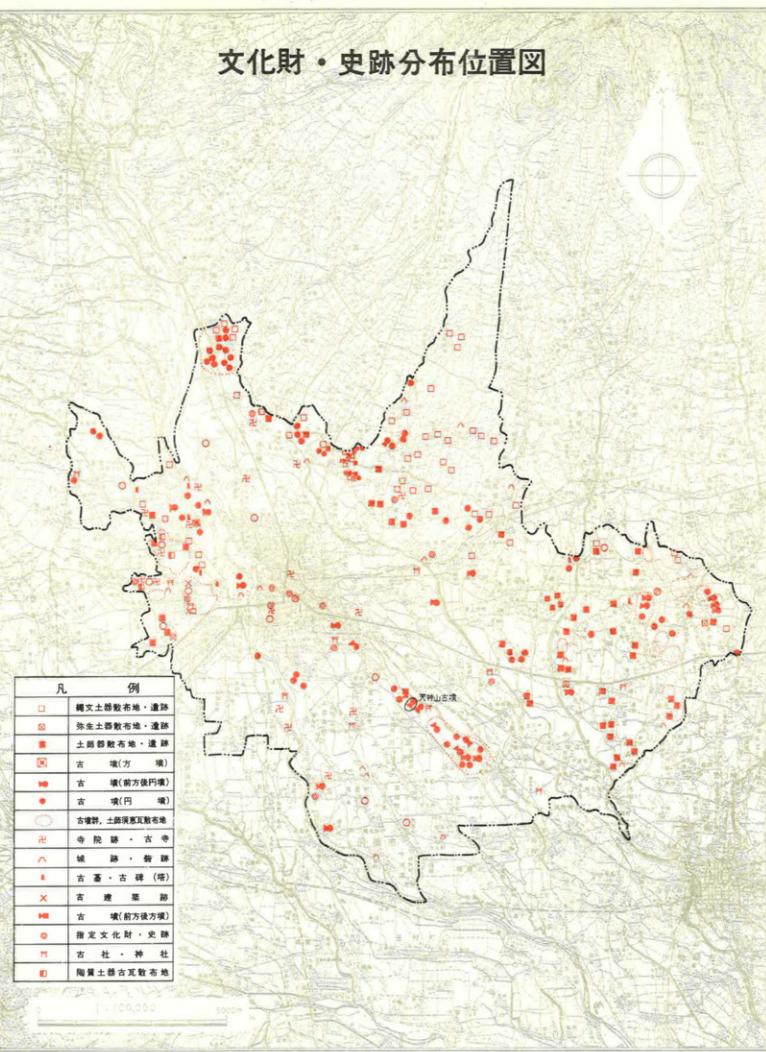
昭和45年3月

前橋市教育委員会

教育長 伊藤順



## 文化財・史跡分布位置図

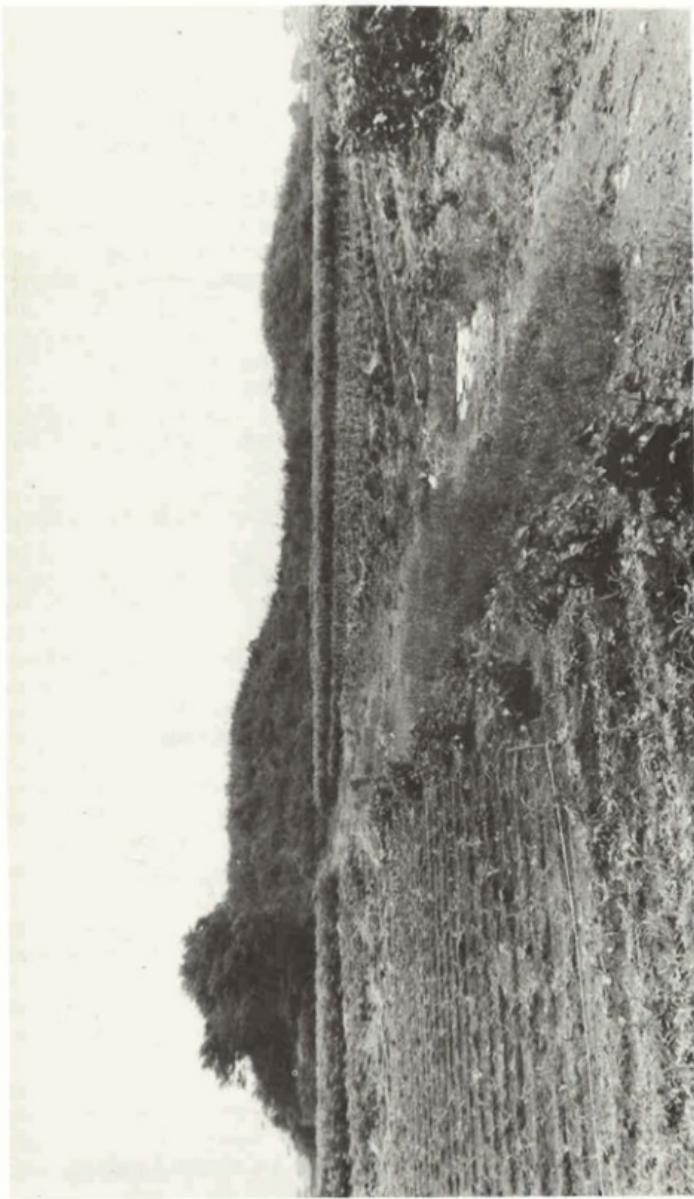


前橋市教育委員会

## 図 版 目 次

前橋天神山古墳全景（位置図）	1	39. 鏡・出土状態	22
1. 天神山古墳葺石調査	2	40. 三角縁四神四獸鏡下における劍の配置	23
2. 天神山古墳より八幡山古墳を望む	2	41. 鞍上面における劍出土状態	23
3. 蓋石段築（後円部東側トレンチ）	3	42. 粘土椁西方遺物出土状態	24
4. 蓋石（後円部北側トレンチ）	3	43. 銅鏡・劍出土状態	24
5. 蓋石（後円部北側掘部）	4	44. 鉄製矛頭出土状態	25
6. 前方部南側葺石根石	4	45. 棒状鉄製品及び顔料内藏土壙破片	26
7. 前方部北面隅角部根石特殊構造	5	46. 半円方格帯画像鏡	27
8. 前方部南側・葺石・根石	5	47. 二禽二帆鏡	27
9. 天神山古墳外形実測図	折込	48. 变形獸形鏡	28
10. 後円部・前方部接合（北側くびれ部）	6	49. 三角縁神獸鏡 A	28
11. 前方部・後円部接合地点土器出土状態	6	50. 三角縁神獸鏡 B	29
12. 後円部墳頂石敷（西より東をのぞむ）	7	51. 素環刀太刀・内反り太刀	30
13. 後円部墳頂敷石（東部）	7	52. 素環刀・頭部	31
14. 北西部敷石	8	53. 直弧文附劍	31
15. 磚石面土器出土状態	8	54. 把部直弧文	32
16. 前方部南側葺石	9	55. 鉄製劍 その 1	33
17-1. 壺形七器底部片出土状態 その 1	9	56. 鉄製劍 その 2	33
17-2. 土器出土状態 その 2	10	57. 鉄製劍 その 3	34
18. 壺形上器・頭部及び復口縁部	10	58. 劍柄部外装	34
19. 壺形土器・頸部頭部	11	59. 銅鏡 30本	35
20. 壺形土器・胴部	11	60. 銅鏡 型式分類	35
21. 壺形土器・底部穿孔部	12	61. 鉄鏡	36
22. 壺形上器・口縁部	12	62. 柳葉形鉄鏡	36
23. 壺形土器・底部穿孔部 その 1	13	63. 平根形無茎腹快形式鉄鏡	37
24. 壺形土器・底部穿孔部 その 2	13	64. 鉄鏡	37
25. 墓塚竪景（中段除し前の状態）	14	65. 鏡身部に有孔を持つ鏡	38
26. 墓塚中段発掘状況	14	66. 鉄鏡 その 3	38
27. 墓塚全景（南側より）	15	67. 木部に有孔をもつ無茎平根鏡	39
28. 粘土椁全景	15	68. 無茎整頭形式鉄鏡 その 1	39
29. 粘土椁内壁状態	16	69. 無茎整頭形式鉄鏡 その 2	40
30-1. 粘土椁外縁部の粘土をたたいた痕跡	16	70. 鉄斧頭破片	40
30-2. 粘土椁外縁部の粘土状態（南側）	17	71-1. 鐘 その 1	41
31. 粘土椁東端の外縁粘土状態	17	71-2. 鐘 その 2	41
32. 粘土椁上蓋部縁部粘土	18	72. 削り小刀	42
33-1. 粘土椁全景	18	73. 紡錐車 その 1	42
33-2. 粘土椁上蓋部の蝶翼状粘土	19	74. 紡錐車 その 2	43
34. 粘土椁内出土遺物配置状態	19	75. 約針	43
35. 遺物出土状態（東側より）	20	76. 針状金具 その 1	44
36. 粘土椁東端附近の遺物群	20	77. 針状金具 その 2	44
37. 遺物出土状態（紡錐車・鉄鏡等）	21	78. 粘土椁・墓塚及び遺物出土状態実測図	45
38. 遺物群北半・遺物群南半出土状態	21		

前橋天神山古墳全景（北より）





1 天神山古墳葺石調査



2 天神山古墳(手前)より八幡古墳を望む(南より)



3 莖石段築(後円部東側トレンチ)



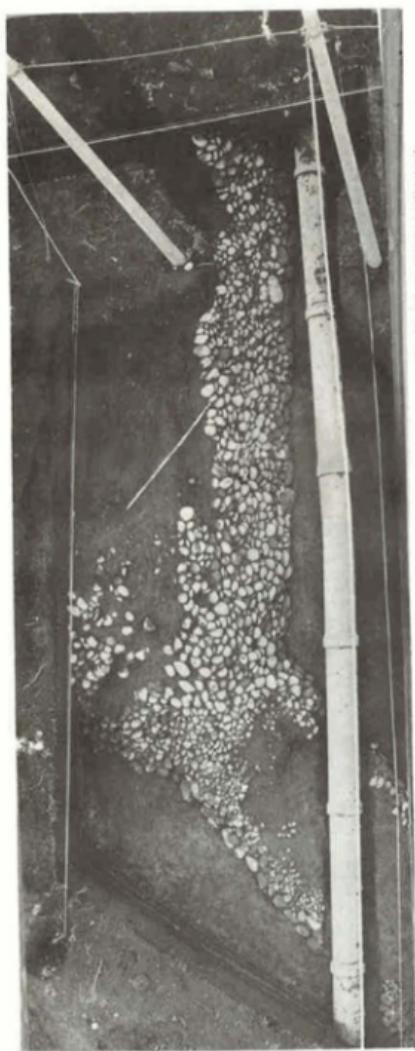
4 莖石(後円部北側トレンチ)



5 莢石(後円部北側裾部)



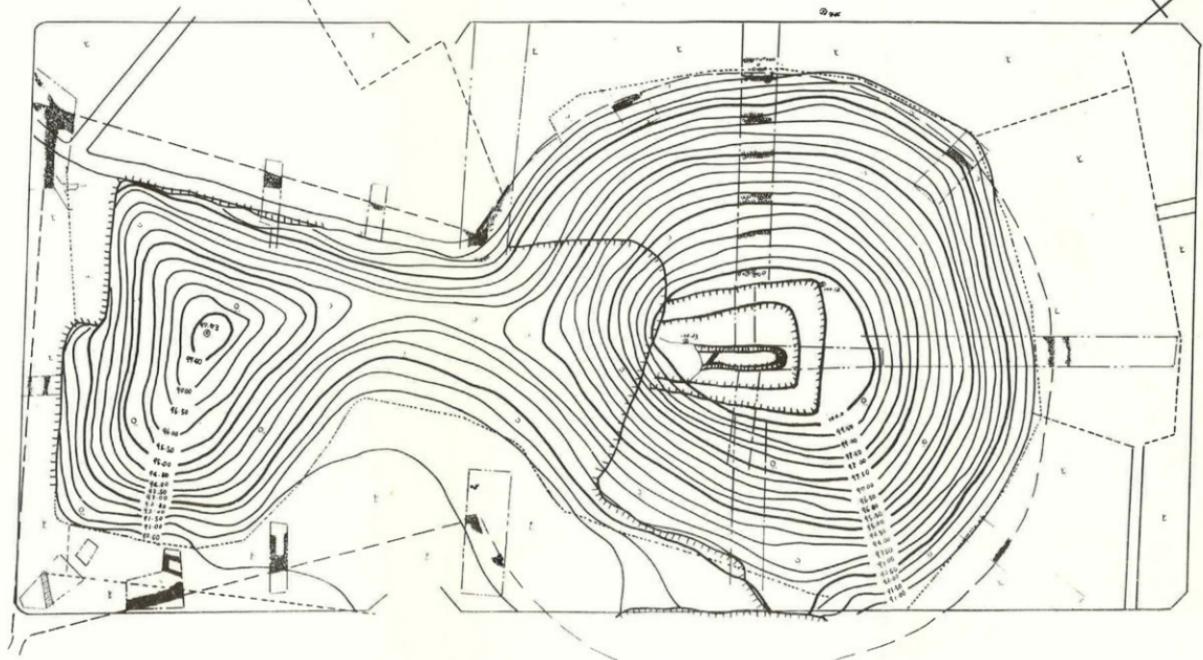
6 前方部南側葺石根石



7 前方部北面隅角部根石特殊構造



8 前方部南側葺石根石





10 後円部前方部接合(北側くびれ部)



11 前方部・後円部接合地点土器出土状態



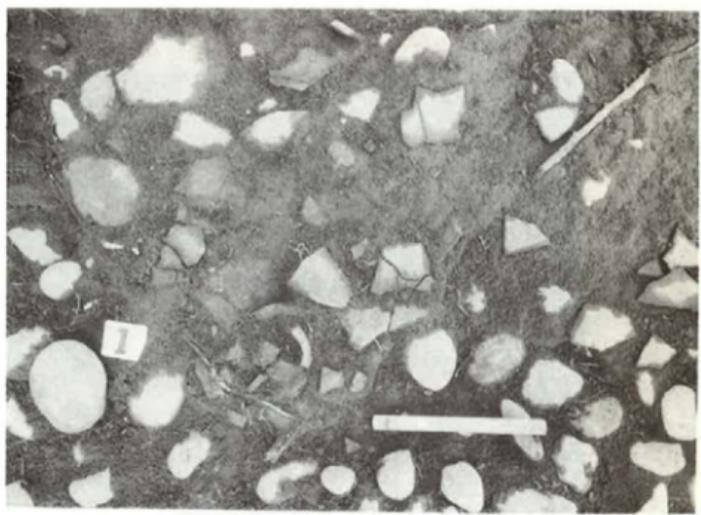
12 後円部墳頂石敷(西より東をのぞむ)



13 後円部墳頂敷石(東部)



14 北西部敷石



15 敷石面土器出土状态



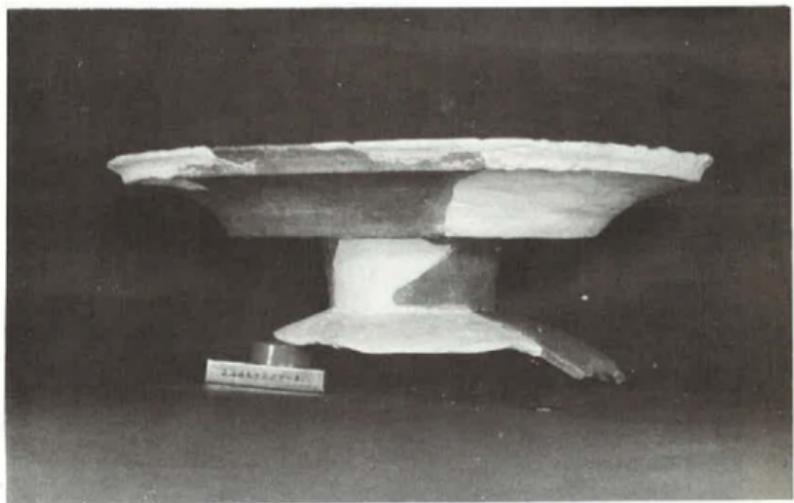
16 前方部南側葺石



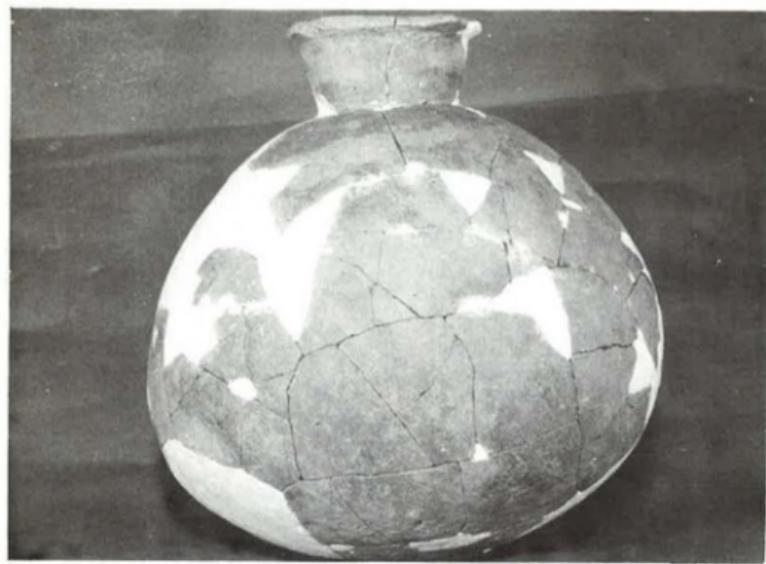
17-1 壺形土器底部片出土状態 一その1—



17-2 土器出土状態 -その2-



18 壺形土器 頸部及び復口縁部



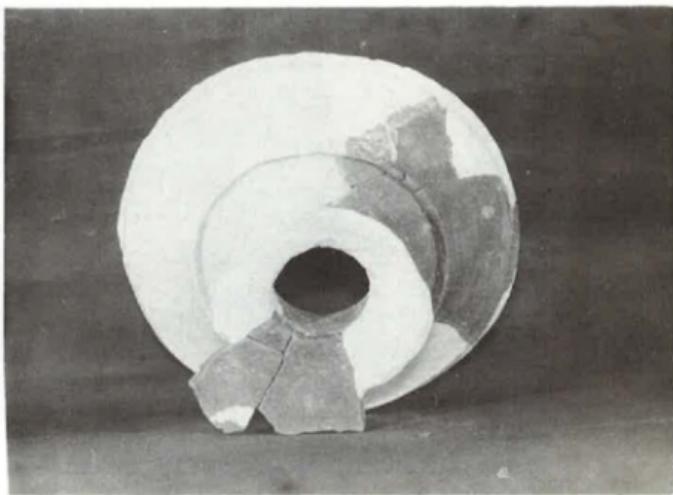
19 壺形土器 頸部及び胴部



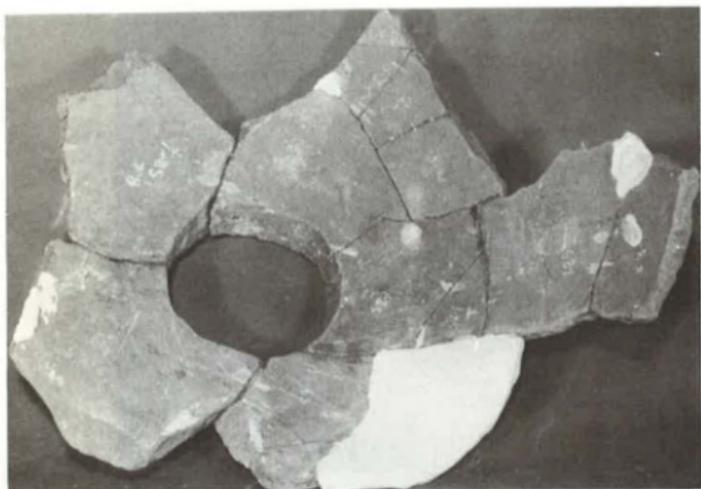
20 壺形土器 脇部



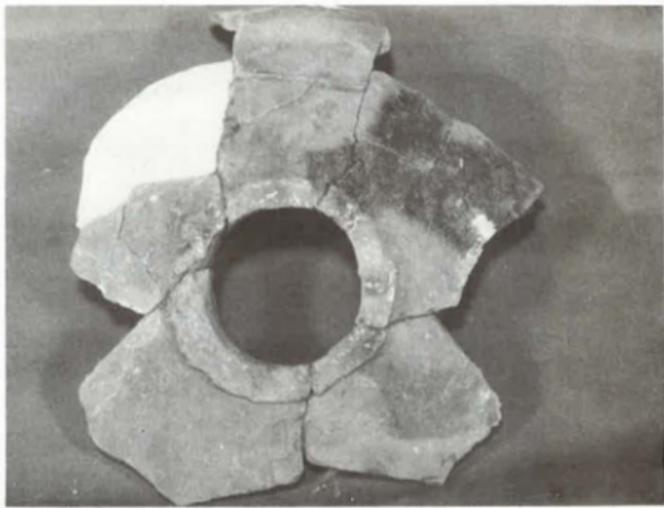
21 壺形土器 底部穿孔部



22 壺形土器 口縁部



23 壺形土器 底部穿孔部 その1



24 壺形土器 底部穿孔部 その2



25 墓塚遠景（中段除土前、前方部側より）



26 墓塚中段発堀状況（南側より）



27 墓塚全景（南側より）



28 粘土桿全景（東側より）



29 粘土櫛内壁状態



30-1 粘土櫛外縁部の粘土をたたいた痕跡



30-2 粘土櫛外縁粘土状態  
(南側)



31 粘土櫛東端の外縁粘土状態



32 粘土棚上蓋部鱗狀粘土



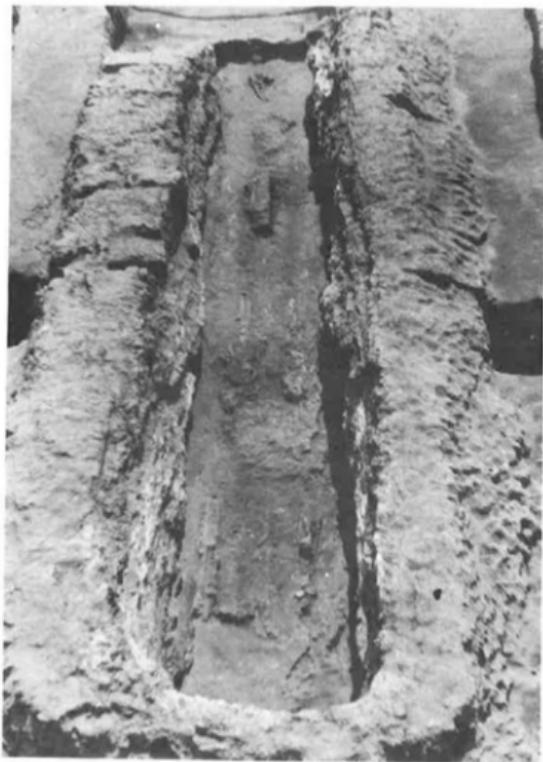
33 粘土棚全景 (遺物出土前)



33-2 粘土櫻上蓋部の鰐翼状粘土



34 粘土櫻内出土遺物配置状態(西より)



35 遺物出土状態（東側より）

36 粘土梆東端附近の遺物群





37 遺物出土状態 (紡錘車・鉄鏃等)

半円方格帯画駕鏡

二禽二獸鏡 1



↑ 三角線四神四獸鏡 2

38 遺物群北半 二禽二獸鏡 1

半円方格帯画駕鏡

太刀 1 口

劍 4 口

鉄鏃 5 本

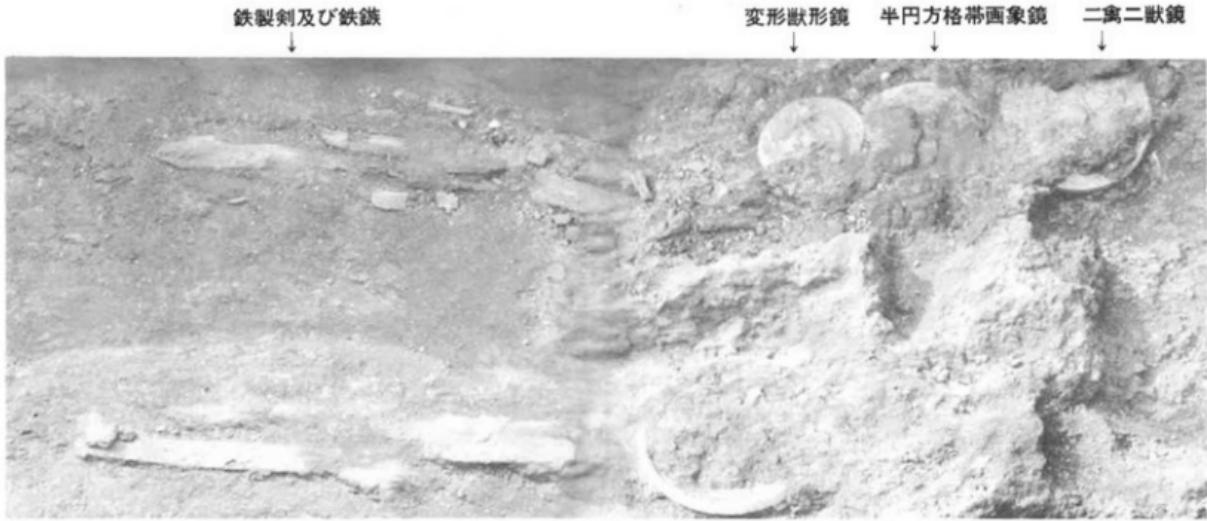
遺物群南半 三角線四神四獸鏡 2

内反り大方 1 口

内反り小刀 1

劍 4 口

鉄鏃 2 本



↑  
鐵  
鏡  
鐵製劍及び削小刀

39 鏡出土状態

↑  
三角縁四神四

↑  
獸  
鏡 (2面)



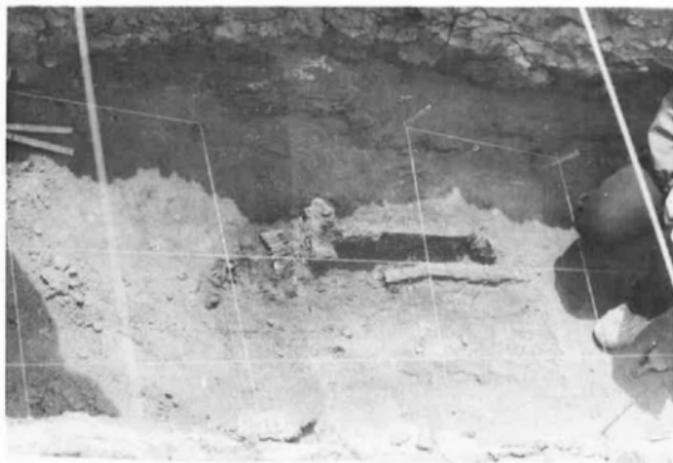
40 三角縁四神四獸鏡下における剣の配置



41 鞍上面における剣出土状態



42 粘土櫬西方遺物出土狀態  
白銅鏡30本・劍4口・瓶1個体



43 銅鏡・劍出土狀態



44 鐵製斧頭出土狀態



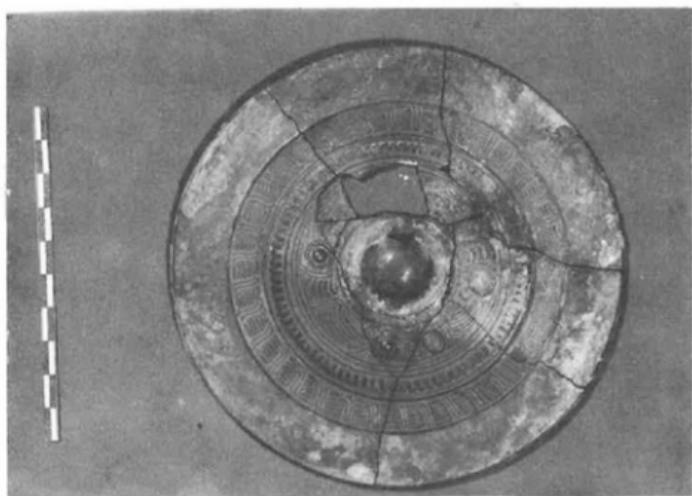
45 棒状鉄製品及び顔料  
内藏土師塙破片



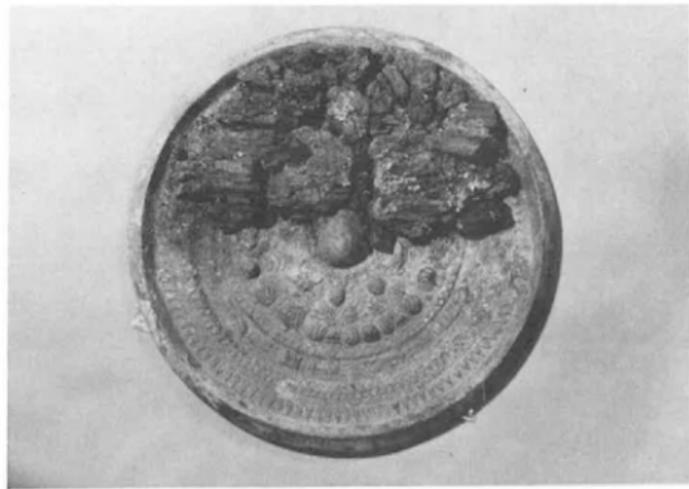
46 半円方格帶画像鏡



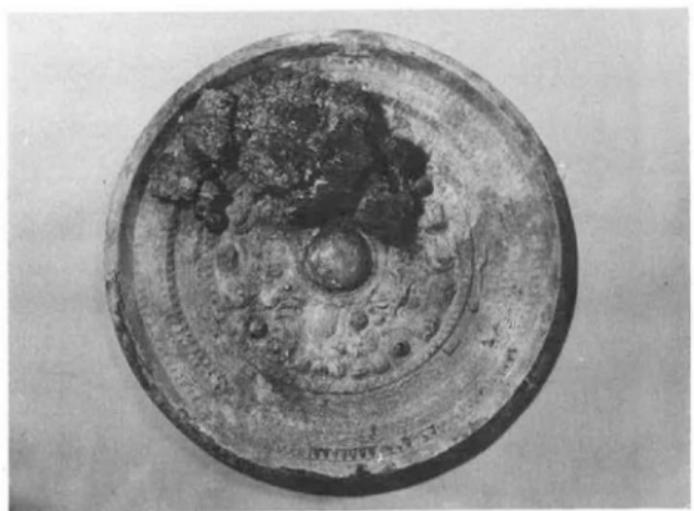
47 二禽二獸鏡



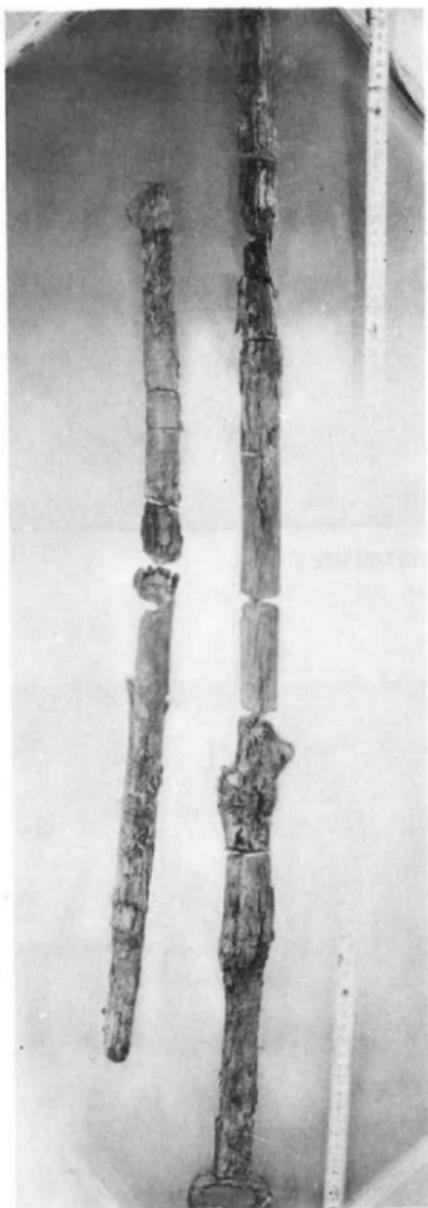
48 変形獸形鏡



49 三角縁神獸鏡 A 約21.7cm

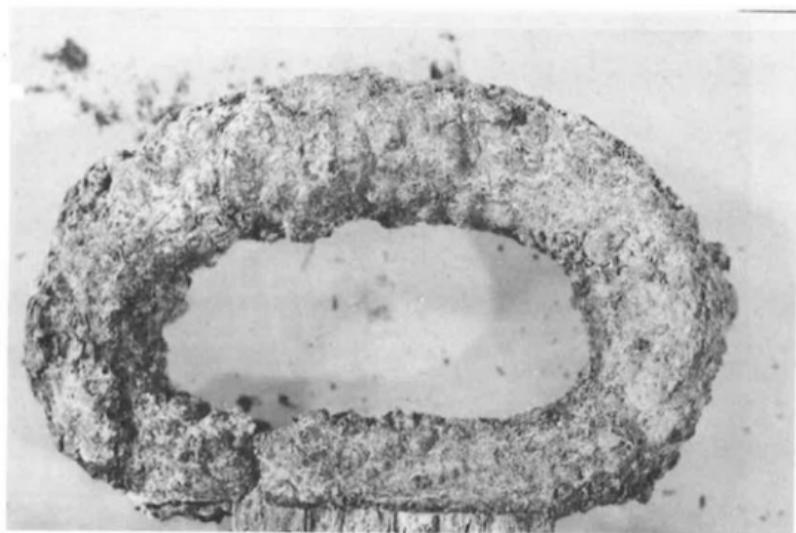


50 三角樣神獸鏡 直徑22.5cm



51 素環刀太刀

内反り太刀



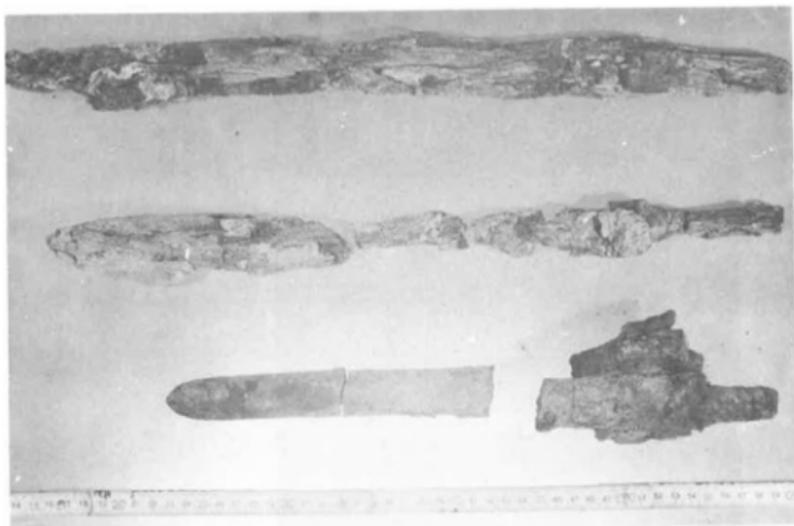
52 素環刀頭部接写



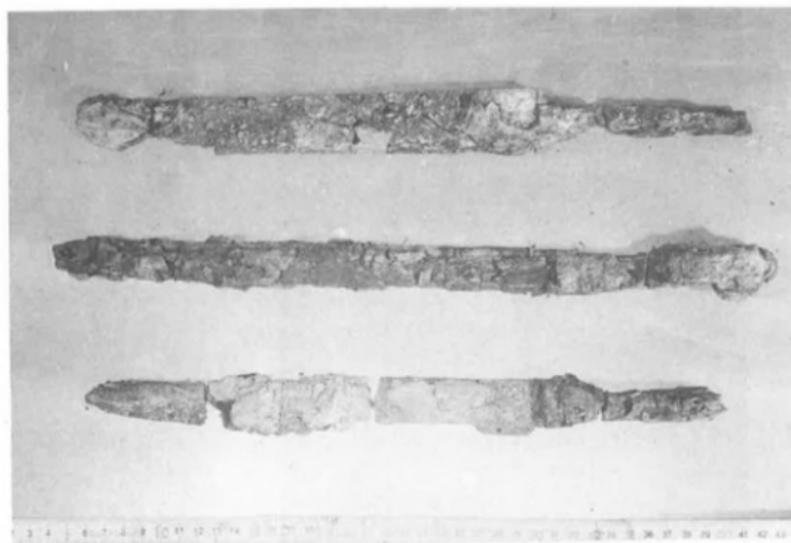
53 直弧文附劍



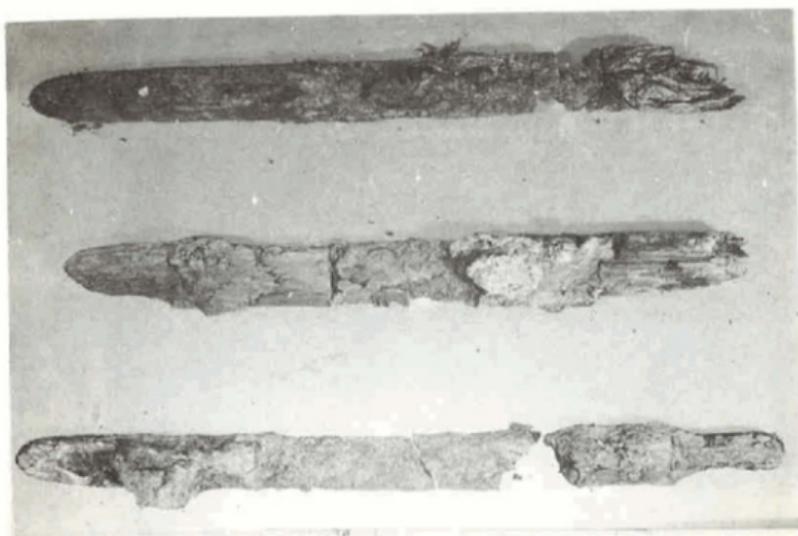
54 把部直弧文



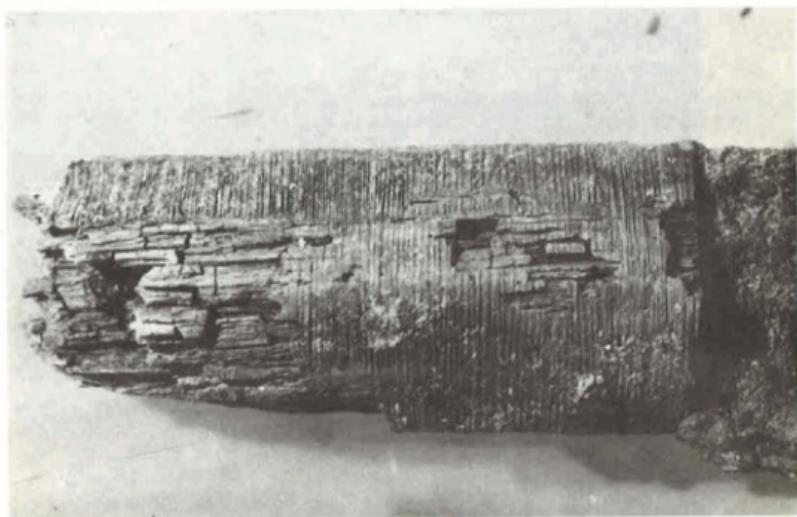
55 鉄 製 剣 その1



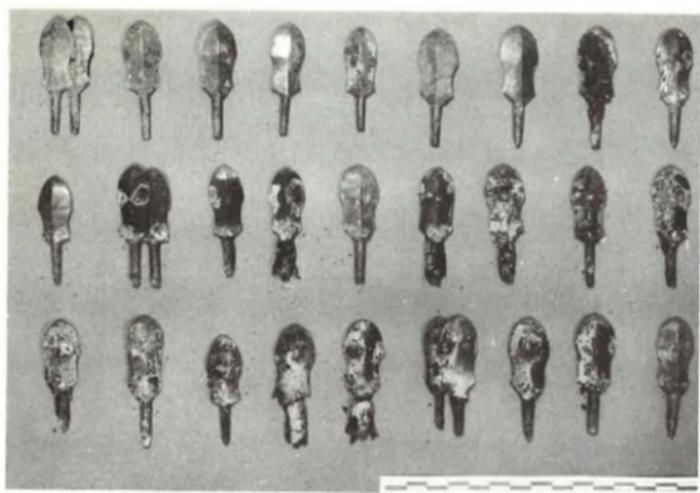
56 鉄 製 剑 その2



57 鉄 製 剑 その3



58 把 部 外 装



59 銅 鐘 30本



60 銅鐘型式分類



61 鐵 鏽



62 柳葉形鐵鏽



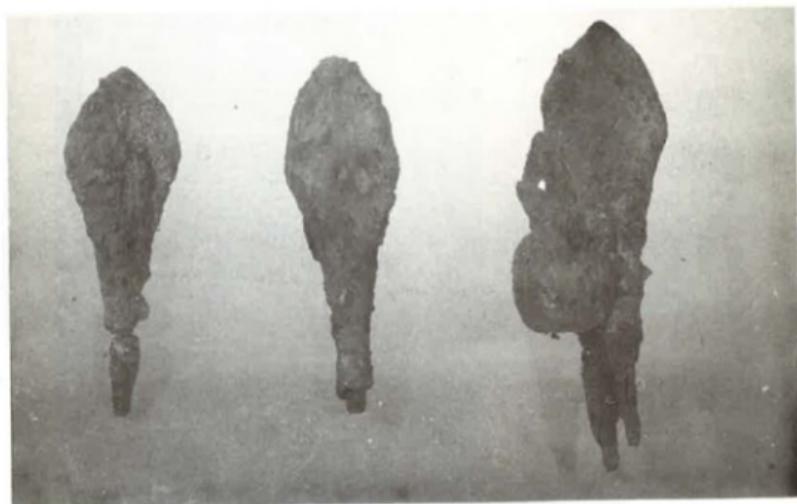
63 平根形無莖腹快形式鐵鎌



64 鐵 鎌



65 鐘身部に有孔を持つ鐘



66 鐵 鐘 その3



67 木部に有孔をもつ無茎平根鎌



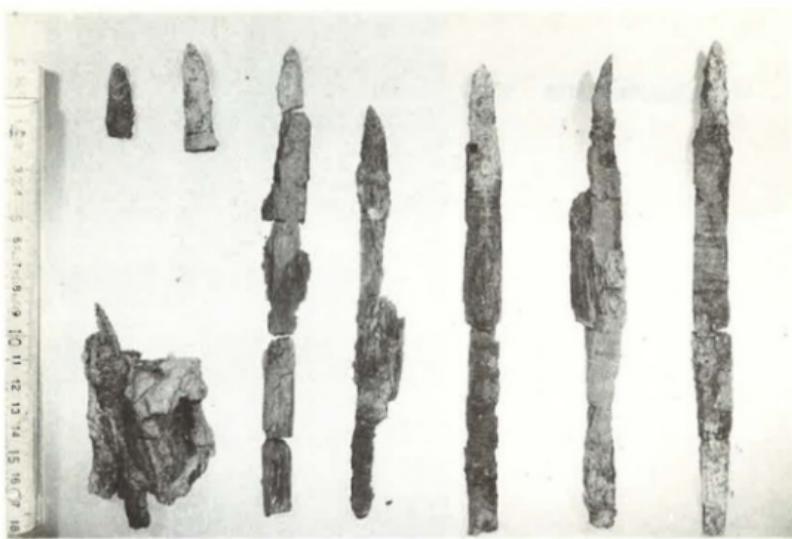
68 無茎鑿頭形式鉄鎌

その1

69 無茎鑿頭形式鉄鎌 その2



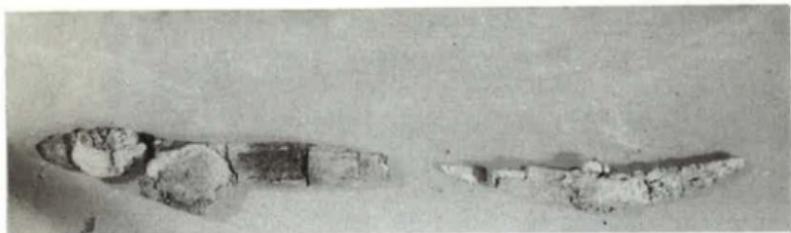
70 鉄斧頭破片



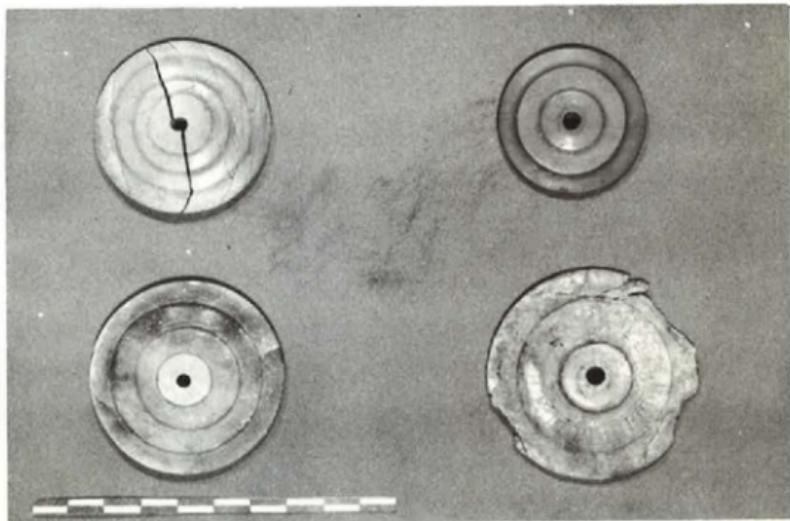
71-1 鑷 その1



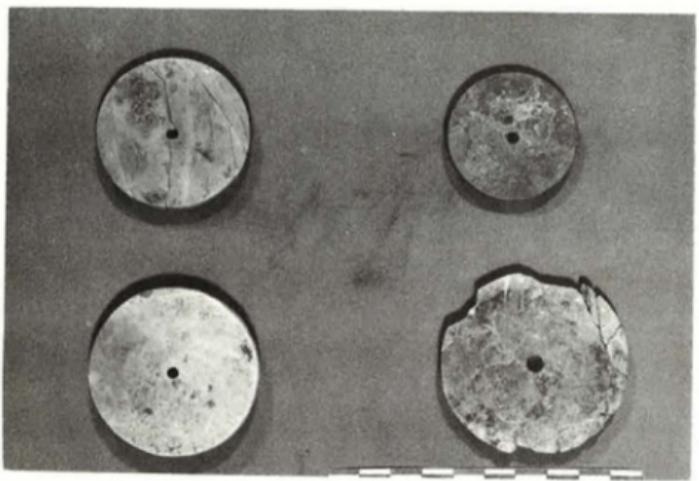
71-2 鑷 その2



72 削り小刃



73 紡錘車 その1 (表)



74 紡 錘 車 その2 (裏)



75 釣 鈿



76 針状金具 その1



77 針状金具 その2

## 前橋市天神山古墳の出土鏡

尾崎喜左雄

前橋市後閑町字坊山1224番地に所在する。前橋天神山古墳は前橋市南方の広瀬川（旧利根川）右岸段丘上に、造営された前方後円墳である。四世紀前半に造られたと推定される浅間山山噴火の轟石層を埴丘築成ベースとしている。主軸は前方部を南西に向け、磁北に35度の方向をとり、その墳形規模は全長129メートル、後円部の径75メートル、高さ9.5メートル、前方部の幅68メートル、高さ約7.2メートルである。

後円部墳頂上は華麗な川原石による平坦な石敷が見られ、その周辺部に赤色顔料で塗装された底部穿孔複口縁壺形土器が底部を石面に埋設して配列された。

埴丘斜面は大きく二段に構成され、直斜面に葺石が施されている。

埋葬主体部は後円部墳頂石敷面から約4メートルの深さに、上縁で長径約22メートル、短径15メートルにおよぶ大規模なさじき状中段を有する墓室を掘り込んだ後、埴丘主軸に平行に構築された粘土椁であった。粘土椁は内法で長さ7.8メートル、幅1.2メートル、深さ1メートルの長大なもので棺は割竹形木棺を使用したものと推定される。

周濠は40メートル以上の帯水濠であったことは判明したが、正確な規模や形状は今後の調査を待たねばならない。

粘土椁内の出土遺物は次にあげる通りである。変形獸形鏡1（第48図）、二禽二獸鏡1（第47図）、半円方格帶面像鏡1、三角縁四神四獸鏡2（第48図・第50図）、鐵製素環頭大刀1、鐵製内反り大刀1、鐵製直刀3、鐵製劍12、白銅製鏡30（3種類）、鐵製鏡78（22種類）、鞞3、鐵製短冊形鉄斧1、鐵製有肩形鉄斧2、鐵製劍8、鐵製劍3、鐵製刀子、鐵製削り小刀、碧玉削り製紡錘車3、用石不明紡錘車1、鐵製釣針状金具5、鐵製針状金具7、鐵製棒状製品4、土師器壇1（顔料内蔵）

(1)変形獸形鏡（第48図）、面直径13.2厘、縁厚0.4厘、鏡面反り0.1厘、周縁は幅2.2厘の素文平縁。鏡背文様は径として、その鉢と続る2本の突線からなる円座鉢を中心として、その外側に環状突起を中核とし抽象化された獸形が配置されている。外区は2本の平行線、鋸歯文帯、縦、横、の繰り返しの波形文様が施され、一段高い幅広な素文平縁をめぐらしている。

地金は質、鑄上りともに良好である。この鏡は第47図および口絵の鏡と相並んで、粘土椁内中央部の壁寄りで、壁に平行の直刀と、直弧文柄部の劍の2口の上に置かれていた。

(2)二禽二獸鏡 第48図及び第47図の鏡と並べて配置されていた。出土時にも鏡全体に錆青の錆着もほとんど見られず、赤銅色を呈し、鏡体の厚さも加えて、地金質の精良さが窺えた。面直径18.5厘、縁の厚さ0.8厘、鏡面反り0.2厘を計る。内区の文様は径3.5厘の比較的扁平で大形の鉢を中心に、6個の小形円座鉢と、その各鉢間に施された6個の花弁状の文様、数個の小突起からなる特異な円座がめぐらされ、その外側に4個の環状鉢と二禽と二獸とを交互に配列した対称文様。外区は素文空帯上に26文字の銘帯、櫛齒文帯、鋸歯文帯、複波線文帯、鋸歯文帯、縁の稜線の見られる素文の外縁部へと続いている。内区の禽獸文様は尾の長い、孔雀を思わせる鳥と、4

ツ足で大きく口を開き、吠えているような動的表現をとっている獣形である。銘文は左行であり、左右逆文字、偏、旁の省略された文字も見られたが、「尚方作鏡大無傷巧刻之成文章和以銀錫齊且明長保二親号」と解説された。

(3)半円方格帯画像鏡 第46図、第47図と同様、鏡背面を上に向け、直弧文付劍に載って出土した。面直径16.3厘、縁の厚さ0.4厘、鏡面反り0.2厘である。文様は2.8厘の円座鉢を中心として、大きく三区分された所謂階段式内区と方形に囲まれた13文字と半円の唐草状様が、交互に配列された銘帯、そして2帯の外区とから構成されている。内区は各区間とも神像及び脇侍が8体、4体、4体と合計16体が鋳込まれている。8体が存在する区間では天蓋の下に座した神像が中心となり、脇侍と共に鉢のある中間区に脚部を置いている。中間区は鉢の左右に正座した神像を配し、それを各々異った抨具を持った脇侍が見守る文様である。他の区間の文様配置は以上と逆向きになり抽象化された鳥を想わせる文様の左右に対称的に神像及び脇侍を2体づつ配置している。銘文は「若宣高官長宜子係位至三公号」である。外区は櫛齒文帯と、その外側に唐草文様と花葉とをおび込んだような文様帯とから構成され、外線は素文平線である。地金質は精良であり、鋳くずれもほとんど認められない良質の白銅鏡である。

(4)三角縁四神四獸鏡 面直径22.5厘、縁の厚さ1.1厘、鏡面反り0.3厘である。内区は作りの良い穿孔を有する3.5厘の鉢の周囲に蛇腹文様の円座を継ぎし、さらにその外側に4個の円座乳を配し、共に並列した2つの神像と獸形とを乳間に置いている。又2個の笠松文も日輪形の環状模様と共に乳間の対称的な位置に配されている。内区の主要様帶の外周は外区に突端を向けた櫛齒文帯が続いている。銘文は抽象化した唐草文を地に鋳込み、その間に長方形を半分に区切って天・王・日・月と左行に細長の文字で合計4箇所に横書きされている。外区は櫛齒文帯、二重の鋸齒文帯、複波線文帯、鎧齒文帯が環周し、所謂三角縁へと続いている。文様は観く、外縁と鮮明で金質も三角縁の光沢ある灰白色に見られるように、全体的に良質の鏡である。第49図の三角縁鏡と相並び、第48図、第47図および口絵とは反対の粘土櫛内中央壁寄りに、内反り大刀と二口の上に鏡背面を上部に向け出土した。

(5)三角縁四神四獸鏡 面直径21.7厘、縁厚1.2厘、鏡面反り0.3厘。第49図の鏡と縁を接し合って出土し、第49図の鏡に比べてわずかに径が小さいが鏡背面の文様構成は極似している。内区文様は4個の乳によって大きく、四分され、その中心には蛇腹文様の環周した円座をもつ、比較的作りの良好な、径3.2厘の鉢を配する。乳によって4分された乳間には像神と獸形とが正面を向いて、二個づつ並列され、乳から円座鉢までは縱状に笠松文がある。内区主要文様帶の外周にひ錐齒文帯が続き、銘帯はその錐齒文帯と櫛齒文帯の間に介在し、4個の銘文と、その銘文間を繋ぐ、変形化された獸形とから構成されている。文字は幾分形の崩れた長方形を縱横に十文字に割して4分し、下段右から横に順に天王、右上段に日月と銘記し、左行に続いている。外区の三角縁に至るまでの文様配列は持団第49図の鏡と同じ配列を繰り返している。重厚を感じさせる作りで鏡体の一部に白光色を呈する地金肌が露呈し、質の良好さを語っている。

## あとがき

地域開発の進行は、各地で文化財保護行政に問題をなげかけている。就中、埋蔵文化財については、その被害甚大である。しかし、開発と文化財保護は、可能な限り両者の協調理解のもとに進められねばならないであろう。開発も文化財を無視した開発ではなく、それを現代の開発の中にいかに活かした計画をたてるか研究考慮すべきであり、文化財保護行政もすべての保存を固執し、頑迷におちいっては真に協力を得た保護は全うし得ない。開発か保存か、伝統と将来を考えて、その接点をもとめて行政を進めていくことが如何に困難なことか、今回の天神山古墳の発掘はそれを如実に物語ってくれ、今後のよき指針となつた。

天神山古墳の周辺は、昭和四十二年度からの市の区画整理事業に組入れられ、該古墳も平夷される予定になっていた。平夷前に調査をし、せめて記録保存だけははということで、第一次調査を昭和四十三年七月二十一日に開始した。以来第四次調査まで一年余にわたる調査で、その概要は次のとおりである。

- 第一次調査 43. 7. 21~8. 6 墓丘現状測定と後円部葺石調査
- 第二次調査 43. 11. 13~11. 16 両側周壁調査……道路設置に伴い
- 第三次調査 44. 3. 16~4. 9 後円部頂上粘土幕調査
- 第四次調査 44. 7. 21~8. 2 前方部周壁調査

以上の調査は、区画整理事業の進捗に併せて、群馬大学史学研究室と前橋工業高等学校歴史研究部があたり、尾崎喜左雄教授指導のもとに、松島栄治教諭が直接担当として調査にあたった。しかし、区画整理事業の進度に対し、調査はそう簡単には進まなかつた。炎天下連日の発掘作業は、体力的にも限界があり、また、学生の休暇中という制限もあり、予算的にも追加補正の繰返しだつた。特に、粘土幕出現は、予想外のことであり、前方部平夷後、開発関係のブルによって前工OB 笹岡君により発見され、急ぎ工事中止して調査にとりかかる始末であった。しかも幕内からは、五面の鏡ほか多数の遺物が発見され、調査は一層綿密を要し、日程、予算ともに予定ではすまされなくなってしまった。それとともに、当初平夷予定であったこの古墳を保存するか否かが論議されてきた。文化財保護の立場にある市教委は、関係諸機関と何度も会議をもつたが、該地域は既に仮換地済みの土地であり、巨額の買上げ予算を必要とした。この間、県教委へも再度に及ぶ陳情をし、漸く前例のない未指定文化財に補助金交付が県議会で決定され、最少限ではあるが、粘土幕を原位置に保存する旨安がついた。その後遺物の整理、土地買収、粘土幕保存等の仕事が進められ、漸く年度末にいたって保存工事が着手された。

このように、埋蔵文化財保存については、予想されない問題が次々とおこり、一基の古墳をめぐらしく、昭和四十二年十二月二十二日に申請してから、二か年半にわたりほぼ完了したのである。

以上の間、関係職員の努力は勿論であるが、調査にあたった学生、生徒の方々、指導の尾崎博士、松島教諭の熱心な協力指導とともに、県教育委員会のご指導、ご協力、市当局の深いご理解は忘れ得ないことどものである。ここに謹んで各位に感謝申し上げ、今後とも一層のご指導、ご協力を切にお願いし、更に本書を読まれる方が、埋蔵文化財保護の容易ならざる仕事であることをご理解いただき今後の保護行政にご協力いただければ一層の幸甚である。なお、詳細な研究報告書が後日刊行されることを期待する次第である。

昭和四十五年五月三日

前橋市教育委員会

社会教育課長 近藤義雄

